集落研究における集合的記憶の活用
―沖縄県今帰仁村謝名集落を事例に―

松　井　幸　一
楊　　珺　屹

1．はじめに

1　問題の所在と研究目的

地理学の命題は空間にみられる自然・人文現象をいかに分析するかである。現にこれまでフィールドワーク調査，統計学的調査，景観復原など様々な手法によって空間は分析されてきた。これらの分析は定量的成果として扱われることが多く，空間は定量的分析によって解釈される事が多い。その一方で空間という抽象的なものを定量的成果のみで明らかにすることには限界もある。そのためライフヒストリーやオーラルヒストリー，または日記などの記録から空間を捉えようとする定性的研究も地理学をはじめ隣接分野では数多くおこなわれてきた。このような定性的研究では，空間という抽象的なものを分析する際に，個人の主観が強く表れる口述や日記などをどのように扱うかが一番の問題である。話者の語彙の多寡や客観的説明能力，調査者と話者の関係性などによって調査結果は変容し，また調査成果の解釈の方法によっても分析結果が異なる場合もある。しかし，話者の属性を明らかにし，検証可能な客観的な分析方法を利用すれば，定量的な分析では明らかにすることができない，社会における個人または社会集団の生活の有り様を分析できることも確かである。本研究では沖縄県謝名集落において，集落内の空間がいかに構築されているかを集合的記憶を活用し定性的に明らかにしたい。

2　研究手法としての集合的記憶論

本研究ではインタビュー分析に社会学者の M. アルヴァックスが提唱した集合的記憶論の手法を利用する。元来，地理学では記憶とは個人に属するものと捉えられ，メンタルマップの分析などを通じて場所の空間認知に活用されてきた。もちろんそれら個人の認知空間の集合から，より幅広い社会構造の意味での認知空間の分析もおこなわれてきたが，定性的成果を扱うことからその分析手法は少ない。一方，空間は社会学の分野でも E. ハワードの田園都市の実践的手法からの検討，E. バージェスの同心円状都市構造モデルをはじめとするシカゴ学派による社会構造の徹底した実態研究と都市全体の秩序を発見しようとするマッピング的手法から検証されてきた。また G. ジンメルのように都市空間を人間相互の関係性から分析し，血縁的繋がり，社会的繋がりと社会的距離という視点から都市空間の多義性がいかに構築されるかを定量的・定性的に解明しようとする試みもおこなわれてきた。M. アルヴァックスはこのような空間研究を踏まえて，記憶には物質性と空間性があると提示する。つまり「実際の社会では記憶が個人で完結することは例外的。他者と出来事を共有し，他者とともにアクセスできる公共的な手がかりの中に記憶を保持し，それらを手がかりを用いながら他者とともに再びそれを想起する。」このような日常生活における記憶のあり方を M. アルヴァックスは集合的記憶と呼んだ。

ここではアルヴァックスの集合的記憶の前提を提示する。心理学において記憶は記銘・保持・想起の 3 段階からなると考えられ，これらは全ての段階で他者から切り離された状態でおこなれわる。ただし，前節で述べたように，実際の社会では他者とともに記憶を想起するのが一般的である。自身の記憶が「心」にないとした時，アルヴァックスは過去は物質や空間の中にあるという。

> 「*もし過去が実際にわれわれを取り囲む物的環境によって保持されていなければ，過去を取り戻せるということは理解されないだろう。……しかじかの部類の想い出が再生されるために，われわれの思考が凝視しなけれ*

ばならないのは，この空間なのである。」

この過去を想起する際の仕組みをアルヴァックスは「記憶の社会的枠組み」と言う。「社会的枠組み」とは集団が共有する時間についての概念（日付，年号，暦），過去の生活や出来事の痕跡を残す空間（伝統的な街並み，遺跡・遺構），人々が繋がりを考えるときに用いる慣習的思考様式（物語の雛形，推論の図式），人々の認識が思考を支える言語や記号を指す。

人々が保持している記憶や想起された過去は個人的事実にとどまらず，その基盤となる集団によって共有され集合的事実を構成し，ここに個人の記憶から切り離して考察することのできる固有の対象としての「集合的記憶」が見いだせる。つまり記憶は個人的現象でなく，他者とともに記銘し，他者とともに想起するものであり，記憶を思い出すのは個人であるが，個人は集団の一員として，集団の「社会的枠組み」を用いて過去を想起するのである。

人々が何かを想起する際には「社会的枠組み」が介在し，集団にとっての合理性，社会的理性が働いた結果，「集合的記憶」は個人的事実と集合的事実の接合についての考察を可能とする理論的装置としての役割を果たすことができるのである。このように「記憶」は「過去」を振り返るたびに現在の視点から「過去」を再構成する営みと捉えることが可能であり，その「過去」は物質や空間の中に保存されているというのが集合的記憶論の特徴である。

この特徴を踏まえれば「過去」を想起できるのは，直接的に体験した人々以外も可能であり，誰もがアクセス可能な物質や空間を手がかりとして，集団の「社会的枠組み」を用いて現在の基盤の上で過去を再構成することで当事者以外が「過去」を想起することこそ集合的記憶の最大の特徴といえる。長谷川らはこれを「ヒロシマ」を事例に「ヒロシマ」を思い出すのは戦争体験者だけでなく，平和式典に参加したり，それに関する新聞やテレビ番組を見たり，関連する場所へ訪れる人々が「ヒロシマ」を想起する。このとき集合的記憶の概念は，個人的記憶の射程を超えて，歴史の領域へと越境すると指摘している。

2．「空間」と「場所」と集合的記憶

集合的記憶を利用した分析は，個人記憶の集合を社会集団の分析に利用する手法である。この手法を実際に都市空間において具現化したものとして挙げられるのが，K. リンチの『都市のイメージ』である。建築家であり都市研究者でもあるリンチは空間認知において①道筋（path）②境界（edge）③地区（Districts）④結節点（Nodes）⑤ランドマーク（Landmarks）の 5 つの基本要素を指摘する。これら 5 つの要素を視点として個々の人々に認知地図を描かせることにより，都市空間を部分的イメージから全体的イメージへと構築し，全体としての都市イメージがいかに構成されるのかという分析手法を提示した。これはまさにアルヴァックスが提示した個人イメージから構築される集合的記憶を都市空間分析にまで落とし込んだ分析手法といえる。この分析では「空間」は抽象的で個々のイメージに残りにくいが，人々が生活する「場所」は強く意識されることを示しており，Y. トゥアンが指摘する「ある空間が，われわれにとって熟知したものに感じられるときには，その空間は場所になっている」との指摘と合致する。つまりある空間を体感しつつ知る事によって「空間」は「場所」へと変化し，その「空間」と「場所」が持つそれぞれの記憶の集合こそが集合的記憶であって，ここに「記憶」と「空間・場所」の結合が見られるのである。したがって本稿で分析対象とする謝名集落の集合的記憶は，それ自身にふんだんに「空間」や「場所」を含んでおり，これを単に話者のテクストとしてでなくコンテクストとして分析すれば，その背景にある深層または深層空間の定性的な分析が可能になると考える。本論で利用する定性的分析は個人に焦点を当てるライフヒストリーやオーラルヒストリーとは異なり，複数の「記憶」の統合から社会集団を見つめ直すもので，これまでの集落空間構造研究とは異なる視点からの分析が可能になるだろう。

3．分析方法と抽出される空間

本研究ではテクスト分析としてSCATを利用した分析をおこなう。地理学においてテクストを含む定性的分析には定量的分析と異なり，体系的・包括的・明示的な分析方法が存在しない。そのため一般的には話者のテクストをコーティングし，キーワードを付け，分類しながら理論化がおこなわれる。しかしここでも分析者の熟練度によって適当なコードが案出できずコーティングができない，または理論化できないという問題をはらんでいる。SCATはそれらを解決するために検証可能で明示的な分析方法として開発され，大きく4つの作業を経てテクストを定性的に分析する。その分析ではエクセルのようなマトリクスにセグメント（区分）化されたデータを記述しながら，（1）データの中の注目すべき語句（2）それを言いかえるためのテクスト外の語句（3）それらを説明するようなテクスト外の概念（4）そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順でコードを付与する。これらコードが付与された後にストーリーラインを考え，理論を構築する分析手法である（表1）。本論ではこの手法を利用することにより，話者の表層の話から「空間」と「場所」のストーリーを理論化し，複数のストーリーを結合することによって集合的記憶にもとづく「空間」と「場所」の再構築を目指す。

グループインタビューの対象者は5名である（表2）。祭祀をおこなう公民館区長を中心にサンプリングをおこない調査対象者を選出したため，全ての調査対象者が定年退職した65歳以上となるとともに，女性が一人しか含まれないやや偏ったグループとなった。ただし50年以上前の失われた景観をよく知るグループとなり，集落空間における集合的記憶の構築の考察という面からは，かつての景観も含めた多様なインタビューをおこなうことができた。

グループインタビューでは半構造化した質問をあらかじめ用意し，それに沿って自由に談話する形式をとった。空間に関して用意した質問は「子どもの頃の遊び場」,「聖地」,「風水」,「豊年祭」である。それぞれに対して自由発話

表 1　SCAT を利用した分析例

番号	発話者	テクスト	〈1〉テクスト中の注目すべき語句	〈2〉テクスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテクスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	〈5〉疑問・課題
1	E 住民	子ども，各地域ごとで遊ぶもんですから，私は，今おっしゃるアサギ，こっちの班なんです，あっちに住んでるので。やっぱねあの家，こう陣地囲って，この細い道から通る時に，相手側が押して，この線から出たらばばつ。飛び越えてったら相手の陣地入るわけが，タネギレした人，タネギレしたところは負けして，あっちで線引いて，いつも遊んでました。それから，周囲には大きな木があって，周囲，枝から枝渡って，男の人はよ，遊んだりやっていました。	子ども/各地域/遊ぶ/アサギ/班/タネギレ/男の人	聖地/地区内行政区画	遊ぶ友人・地域の行政区画による区分	集落内での小地域区画を意識した生活	子ども時代の狭い認知空間は大人になった際に引き継がれるのか？
2	E 住民	うん。木に触って，手で触って，相手の頭触るサンドーシーというの，遊びがあるんです，サンドーシーという。	木/遊び	自然	自然を利用した遊び	かつては身近に自然が存在した	身近な自然をなぜ今，意識しないのか？
3	A 住民	山の下ですけど，向こうにもフクギ並木があって，フクギ並木は密集して植えられてますから，これから渡って遊ぶんですよ。この遊びはよくやりました。それと拝所（うがんじゅ），これはもうまきも取っていかんわけですよね，昔から。こちらはもう入るなっていうことで，親には注意されてんですよ。子どもの頃は，どちらかというと鳥，小鳥を捕ったり，巣を見つけてメジロを追いかけたり，川で魚を捕ったり，ヤギ捕ったり，こんな遊びでした。	山の下/フクギ並木/密集/拝所/薪/小鳥/魚/ヤギ	里山/風水/聖地/自然	身近な風水景観/聖地の禁忌性/たくさんの自然	豊富な自然を活用した風水思想の存在と禁足地としての聖地	自然の消失によって風水思想は失われたか？
4	E 住民	要は，この聖地の話ですね。これは，まきなども，それ平生（へいぜい）は，取っていかない規則なんです。それで11月の24日，あるよね。字で御願（うぐぁん）あるよね。これは御願ブトゥチ，御願を，神様が守ってる期間を解除して，24日から1日までは神様は休憩で自由なんです。その間に，そこからまきなど出して，これ，字のまきなんです。これを幾つかに分けて入札して，字の競りに出ます。あんた方はちょっと分からんかもしれない。戦後時期までやりました。だから常，平生は絶対取っていかなくて，24日の御願ブトゥチやったらこの間は神様は休みなんです。休みの期間に，拭ち掃除〕＝カタラタ＝まき出して，区民に，幾つかの山作って入札。	聖地/御願/御願ブトゥチ	聖地/里山/禁足地/信仰	御願/神聖な場所/聖地と里山の両義性	聖地と生活の場としての両義性	

を促しつつ，回答に対してさらに関連する質問を重ねていった。本稿では「遊び場」,「お宮（謝名御嶽）」の 2 つの語句を例にする。これらで語られる空間は表層的な談話では意味をなさなかったが，SCAT を利用して分析をおこなうと深層の意味として別の空間を繋いだり，基盤としての共同体意識を抽出することができた。ここでは「遊び場」についての一例を挙げる。

表 2　調査対象者の属性

対象者	年齢	性別	最終学歴	職業
A	75	男	大学	元地方公務員
B	75	男	大学	元地方公務員
C	68	男	高校	謝名区長・元団体職員
D	75	女	高校	元小学校教員
E	87	男	大学	元会社員

「*山の下ですけど，向こうにもフクギ並木があって，フクギ並木は密集して植えられてますから，これから渡って遊ぶんですよ。この遊びはよくやりました。それと拝所（うがんじゅ），これはもう薪も取っていかんわけですよね，昔から。こちらはもう入るなっていうことで，親には注意されてんですよ。子どもの頃は，どちらかというと鳥，小鳥を捕ったり，巣を見つけてメジロを追いかけたり，川で魚を捕ったり，ヤギ捕ったり，こんな遊びでした。*」

ここからはまずキーワードとして，山の下，フクギ並木，密集，拝所，入るな，薪，小鳥，魚，ヤギなどが挙げられる。これを言い換えれば，里山，風水，聖地，自然となろう。その概念は身近な風水景観，聖地の禁忌性，豊富な自然が挙げられる。この概念をもとに文脈を再構成すれば「豊富な自然を活用した風水思想の存在と禁足地としての聖地の存在」が明らかとなった。このように表層テクストとしての語りの裏にある深層の意味を繋ぎ，またその意味が指向する空間を考えることによって集落空間における集合的記憶を抽出した。

4．語りからみえる空間のストーリー

本節では「子どもの頃の遊び場」と「お宮（謝名御嶽）」について，いくつかの発話を示しコンテクスト概念およびその深層を示すテーマ・構成概念を踏まえ，空間の深層的意味を探りたい。

a. 子どもの頃の遊び場

遊び場に関しては遊びの形態や場所，遊び自体の思い出などが語られ，居住場所によって複数の空間や場所が認められた。以下にグループインタビューから得られた発話のうち，空間が含まれる箇所を挙げる。

「*子ども，各地域ごとで遊ぶもんですから，私は，今おっしゃるアサギ，こっちの班なんです，あっちに住んでるので。やっぱねあの家，こう陣地囲って，この細い道から通る時に，相手側が押して，この線から出たらばバツ。飛び越えてったら相手の陣地入るわけが，タネギレした人，タネギレしたところは負けして，あっちで線引いて，いつも遊んでました。それから，周囲には大きな木があって，周囲，枝から枝渡って，男の人はよ，遊んだりやっていました。*」

この語りからは班を単位として，村の中でも遊ぶ場所が決まっていたことがわかる。この班は小字を主要単位として構成されることから，子どもながらに自然と小字の領域を理解していることがわかる。

「*山の下ですけど，向こうにもフクギ並木があって，フクギ並木は密集して植えられてますから，これから渡って遊ぶんですよ。この遊びはよくやりました。それと拝所，これはもう薪も取っていかんわけですよね，昔から。こちらはもう入るなっていうことで，親には注意されてんですよ。子どもの頃は，どちらかというと鳥，小鳥を捕ったり，巣を見つけてメジロを追いかけたり，川で魚を捕ったり，ヤギ捕ったり，こんな遊びでした。*」

この語りではフクギが密集するように意識的に植えられていたこと，遊びの中でも拝所は入ってはいけない神聖な場所として扱われていたこと，今は少なくなった豊富な自然の中での遊びが語られる。フクギの意図的な植栽は沖縄の伝統的集落の基盤となる風水思想の村抱護，屋敷抱護が存在していたことを示している。

「*そこで全部遊んでた。こっちで遊んだ記憶はない。近い所で。*」

この語りでは遊び場の領域は住居と近い空間に集中しており，自ずと空間認

表 3　遊び場の空間構成概念

空間に関する発話	テクストの概念	テーマ・構成概念
子ども，各地域ごとで遊ぶもんですから，私は，今おっしゃるアサギ，こっちの班なんです，あっちに住んでるので。やっぱねあの家，こう陣地囲って，この細い道から通る時に，相手側が押して，この線から出たらばバツ。	各地域ごとで遊ぶ	小字ごとの意識
山の下ですけど，向こうにもフクギ並木があって，フクギ並木は密集して植えられてますから，これから渡って遊ぶんですよ。	フクギ並木の密集	風水思想
それと拝所，これは薪も取っていかんわけですよね，昔から。こちらはもう入るなっていうことで，親には注意されてんですよ。	神聖な場所としての拝所	聖地
子どもの頃は，どちらかというと鳥，小鳥を捕ったり，巣を見つけてメジロを追いかけたり，川で魚を捕ったり，ヤギ捕ったり，こんな遊びでした。	遊びの内容	豊富な自然
そこで全部遊んでた。こっちで遊んだ記憶はない。近い所で。	遊ぶ場所の差異	空間から場所への認識変化

識も住居に近い箇所に集中し，そこを熟知していく過程を経て「場所」としての認識が形成されることを示している。

遊び場の空間構成概念を整理したのが表 3 である。遊び場に関する語りでは，遊び場は各地域ごとに決まっており，かつて存在していたフクギ並木の密集するような場所や川で鳥や魚などを捕るなどして遊んでいた。固有の遊び場を越えて遊びに行くことはほぼ無く，居住地に近い空間が遊び場として選ばれている。拝所は神聖な場所として親から言い伝えられ，そこで遊ぶことはなかった。また遊び場としての経験がその空間を熟知させ，空間から場所へとより身近なものへと変化する過程を示唆している。このコンテクスト上の概念を再構成すれば，「豊富な自然を活用した風水景観と禁足地としての聖地が存在する。聖地は親からの教育によって神聖な空間として認識され，その認識は代々継承されてきた。「遊び」を通じて居住地近くの空間は熟知され，身近な「場所」へと変化している。」ことが明らかになった。

b. お宮（謝名御嶽）

集落にはお宮または謝名御嶽と呼ばれる空間が存在し，そこは聖地としての機能とともに住民にとっては集落の象徴的空間と認識されている。

「*お宮はもう，私はお宮のすぐ近くで，こっちを前，通る時は，学校に行く時もおじぎして，帰る時もおじぎして帰りました。これ，親から教えられました。あの当時は，日曜日になると，毎週ですよ，この通りからお宮の前，ほうき持って毎週 1 時間か，1 時間半ぐらいは掃除もやりました。*」

この語りでは，お宮は神聖なものとの認識があり，親の世代から子の世代にわたってその認識が教えとともに掃除という行動をともなって受け継がれている。

「*入っちゃいけない場所なんですね，お宮の所は。*」

この語りは遊び場の聞き取りの際に語られた箇所である。遊びの場においてもお宮は他とは異なる神聖な場所として認識されていた事がわかる。

「*ここに森があって，これで拝所なんですけど，そして南に向いてというのかな，斜面になっていて，ここが，これやるところの中心地なんですよ。そうすっと部落の中心地になるわけ。で，後ろは北風にもなるわけ。そういう意味では，とても立地条件も守られているということがあって，とても関心します。*」

「*大体どの部落でも，こういう，ちゃんと守られてですね，仲宗根などもはっきりしてますよ。仲宗根も，ウートートするところで，お宮の後ろ，後方のほうが山になってて。*」

「*そういう地形を選んで，ウートートやっているんですね。*」

「*南側には水が，この字は水が豊富なんです。*」

「*ニシ（北）風が当たらんからね。*」

この語りはお宮（謝名御嶽）周辺の地形について語っている。特に，お宮が集落の中心として存在し，お宮の後ろが山になり，そこでウートートー（拝み）をおこなう事が語られる。このような御嶽を中心とした集落構造は琉球の伝統的集落構造と一致し，謝名集落の形成思想に腰当と呼ばれる祖先崇拝につなが

る伝統的な思想が活かされていることがよくわかる。またこのような集落の空間構造が水の確保や防風の役に立っていることも認識されている。

「*そしたら，お宮とか行ったこともない，意味も分からない。そういう方々もいますので，ぜひ学習をする意味で*」

お宮が集落中心であるとの認識が共有されている一方で，お宮に関心のない層やお宮の背景を知らない他府県や他市町村から移住してきた人がいるため問題だとの認識を持っている。

お宮の空間構成概念を整理したのが表４である。

表４　お宮の空間構成概念

空間に関する発話	テクストの概念	テーマ・構成概念
お宮はもう，私はお宮のすぐ近くで，こっちを前，通る時は，学校に行く時もおじぎして，帰る時もおじぎして帰りました。これ，親から教えられました。あの当時は，日曜日になると，毎週ですよ，この通りからお宮の前，ほうき持って毎週１時間か，１時間半ぐらいは掃除もやりました。	神聖な場所としてのお宮 歴史的・文化的背景の言い伝え	聖地 聖地認識の継承
入っちゃいけない場所なんですね，お宮の所は。	神聖な場所としての拝所	聖地
ここに森があって，これで拝所なんですけど，そして南に向いてというのかな，斜面になっていて，ここが，これやるところの中心地なんですよ。そうすっと部落の中心地になるわけ。で，後ろは北風にもなるわけ。そういう意味では，とても立地条件も守られているということがあって，とても関心します。	神聖な場所としての拝所	聖地
大体どの部落でも，こういう，ちゃんと守られてですね，仲宗根などもはっきりしてますよ。 仲宗根も，ウートートするところで，お宮の後ろ，後方のほうが山になってて。そういう地形を選んで，ウートートやっているんですね。	お宮と山の空間配置	腰当思想
南側には水が，この字は水が豊富なんです。 ニシ（北）風が当たらんからね。	水と防風	思想の実生活への適応
そしたら，お宮とか行ったこともない，意味も分からない。そういう方々もいますので，ぜひ学習をする意味で	お宮の歴史的・文化的背景の学習	継承の重要性

お宮に関する語りでは，お宮を神聖な場所・拝みがおこなわれる重要な場所として認識しており，それは親の世代から受け継がれていた。またお宮とその背後の山の関係を把握し，そのような配置は生活に欠かせない水の確保や防風のためだという意識がみられた。ただしそのようなお宮やその周囲の環境に関する歴史的・文化的背景を学ぶ必要があるとも感じている。このコンテクスト上の概念を再構成すれば，「お宮は聖地として認識され，その歴史的・文化的背景は親から子へと世代間で継承されている。お宮と周囲の自然環境が集落において良好な生活環境を提供している事を認識していることからも，伝統的集落の基盤となる腰当思想を語句としてでは無く実感として認識している。ただしその歴史的・文化的背景の継承は一部で機能しなくなっており，継承の必要性を共有している。」ことが明らかになった。

5．集落研究における集合的記憶の活用

本研究では謝名集落においてグループインタビューおこない，住民の集団的記憶から集落内の空間がいかに構築されているかを検討した。「遊び場」と「お宮（謝名御嶽）」の分析からは表層のテクストでは見えない背後にあるテーマや概念を読み取ることができた。例えば住民は伝統的集落の基盤となる風水や腰当の思想は表層的には意識していない，または失われたと感じている。しかし，そのコンテクストの深層には思想の基盤となる空間や対象を読み取ることができ，言い伝えや教育によってその空間意識は継承されている。

また興味深いのは空間としての遊び場や拝所などの聖地が，言い伝えや教育によって身近な「場所」へと変化している点である。遊び場も聖地も「空間」としては昔から存在するが，個人が熟知した「場所」としての意味は徐々に失われつつある。それは他からの移住者の増加や昔からの言い伝えや教育の途絶など様々な要因がある。これを集団的記憶で言えば，慣習的思考を含む「社会的枠組み」自体が一部失われつつあるともいえる。集団においてこれまで継承されてきた「空間」の集団的記憶が変容する時，そこに住む人々の空間的アイ

デンティティーもまた失われていく。集落研究において集合的記憶を活用する利点は，単純な聞き取りからでは難しい住民自身が意識していない集落のテーマや構成概念を明らかにするとともに，集落の中で住民のアイデンティティーとなり得る「空間」の成立と継承を明示できる点だろう。今回試行した集合的記憶は空間構造の復原的研究と組み合わせて活用することによって，地理学における集落研究においても新たな視点を与えると考える。

謝　辞

本研究にあたり，謝名区の多くの住民にご対応いただき心から感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP21K01037の助成を受けたものです。

文　献

大谷尚『質的研究の考え方　研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会，2022年。

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』有斐閣，2023年。

ケヴィン・リンチ著　丹下健三・富田玲子訳『都市のイメージ』岩波書店，2023年，281頁。